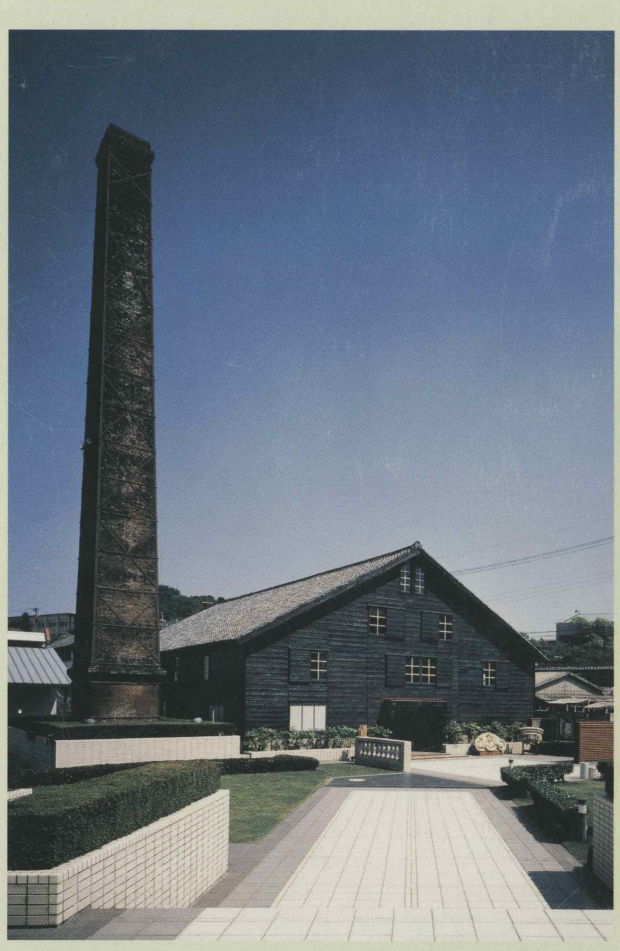
愛知県の近代化遺産



愛知県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書

平成17年

愛知県教育委員会

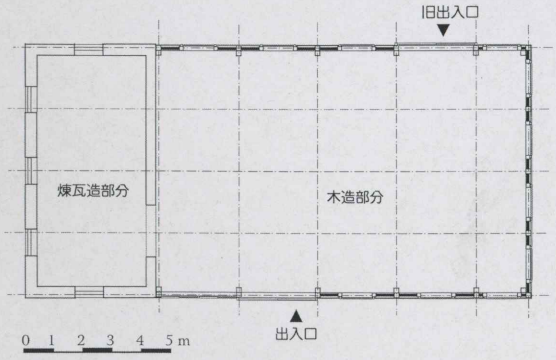
見代茶工場は間口17メートル、奥行９メートルの規模の木造平屋、切り妻屋根の建物である。構造は、擁壁及び基礎は長七人造石、床はたたきで作っている。平面の南側３分の２は土壁塗の木造軸組であり、残りは内側に煉瓦、外側を石による組積造としている。木造トラスによる小屋組の上に、桟瓦で屋根を葺いている。

外観は、アメリカ下見坂張りの外壁に上げ下げ窓を配置した洋風であるが、内側は土壁に漆喰を塗った真壁造りとし、全体的に洋風と和風の技術を併せて用いているところがユニークである。

茶工場に再利用される際、木造軸組部には補強のために添え柱が、また隅部に火打梁が取り付けられた。組積造部分には構造的な劣化は見られないが、内部の土壁と漆喰塗仕上げに多少痛みが見られる。

（泉田英雄）

見代茶工場写真



見代茶工場図面

28　旧中部電力稲沢営業所　工業・エネルギー建築

工業・エネルギー／稲沢市稲葉３丁目／RC造２階建一部３階建／昭和初期／設計・施工不詳

明治中期になって、名古屋地区でも電灯・電力の需要が急増するなか、明治20年（1887）９月に名古屋電灯㈱が設立されたが、あいつぐ発電所建設による電気供給力に余剰を生じたため、名古屋電灯㈱は大口電力の需要家を開拓する必要にせまられていた。このような電力事情を背景に尾張地方でも電気会社が次々と設立され、一宮町をその供給地域とする一宮電気㈱が明治45年（1912）に設立され、続いて稲沢町域でも稲沢電気㈱が電気供給事業を開始した。ところが電気事業の再編がすすみ、大正９年（1920）に一宮電気㈱は名古屋電灯㈱に合併し、名古屋電灯㈱は関西電気会社に合併、大正11年（1922）には東邦電力㈱と名称を変更する。稲沢電気㈱は東邦電力㈱の支配下に入ることになるが、昭和５年（1930）中部電力㈱が創立されることになって、順次この影響を受けることになる。

この建物は、昭和初期に稲沢電気㈱の社屋として建てられたと云われているが、ちょうど東邦電力㈱の支配下にあった頃から中部電力㈱にその影響を受けようとする時期であった。業者は清水建設と云われているが明らかではない。稲沢電気㈱から東邦電力㈱に移り、その後は中部電力稲沢営業所として使用されていたが現在は市の所有になっている。

建物は、前面はせいの高い２階建であるが、背面に一部３階建部分をもつ、鉄筋コンクリート造。外壁は刷毛目をもつ茶系のタイルで仕上げ２階庇部分の装飾は見事である。

（尾鍋昭彦）

〈参考文献〉

1）『東邦電力史』　昭和36年

2）『新修稲沢市史』　平成３年

旧中部電力稲沢営業所